2016 年 10 月 8 日
東京都アーチェリー協会　競技部会

競技規則改訂に伴う講習会

1 競技規則 2016～2017 年の改訂点について

1. 用語の変更

① 得点記録員 → スコアラー
② ポスト → シューティングペグ
③ 照準器(サイト) → サイト(照準器)
④ 40ｃｍ三つ目 → 40ｃｍ三角三つ目
⑤ レインウェアー等の防水衣、防寒衣 → レインギア等の防水具、防寒具
⑥ ピープイリミネーター装置 → ピープイリミネーションサイト

2. 設備・用具に関すること

① 番号板(的番)の色指定の削除
② ドローチェックインジケーター(クリッカー)に、『触覚』によるものを追加
③ 競技者が的中位置を知るための電子装置(テレビモニター等)の使用可能を明記
④ 競技者の用具(衣服、弓具など)のいかなる種類のカモフラージュ模様を含んだものを使用禁止(ターゲット、フィールドともに)
⑤ ターゲット競技における競技者は、色彩の関係なくデニムもしくはジーンズの衣服・用具の着用禁止
⑥ 競技者番号(ゼッケン)を競技者のクイバーまたは太ももに明示する
⑦ パラアーチャーの椅子(背もたれのあるもの)の使用禁止
⑧ ベアボウ部門で使用するタブは、縫い目は同一寸法、同色であり、印または線は、直接タブに付けられたものでもよいが、そのサイズ、形状、色が一定であること。

3. 競技に関すること

① 緊急事態により行射を中断した場合、団体戦では 1 射につき 20 秒を与える
→『残り時間＋５秒』ではなくなった
② 得点記録をする際、スコアラーは競技者の呼称にしたがってスコアカードに記入するが、異議があるときには審判員を呼び、その審判員が最終判断を行う
→ ジャッジコールはスコアラーが異議がある際に行う
③ 競技者は得点帯にあるすべての矢の的中孔に適切な印をつけなければならない
→『Ｍ』の的中孔チェックはしなくてよい

④ スコアカードにスコアラーと競技者が署名することによって、競技者がそれぞれの矢の得点、合計点、10 点数、X点数(またはインドアでは9点数)に同意したことを示す。

（中略）

主催者は署名(競技者、スコアラー)、合計点、10 点数、X点数(またはインドアでは9点数)等の記入のない、あるいは計算間違いのあるスコアカードを受領する必要はない。

主催者または役員は、提出されたスコアカードの正確性を確認する必要はないが、主催者または役員が間違いを発見した場合、その間違いを訂正し、その結果は有効となる。

（中略）

スコアカードに記載されていない情報は存在しないもの(0点)とみなす。

→ 東京都アーチェリー協会としての対応

- 提出されたスコアカードに署名(競技者、スコアラー)、合計点の記載がなかった場合、その競技者は0点とする。
- 10 点数、X点数(インドアでは9点数)の記載がなかった場合、0本とする。
- 合計点に計算間違いがあった場合、高く間違えていたときには正しく訂正し、低く間違えていたときには訂正は行わない。
- スコアカードを回収するのは原則として記録係とし、スコアカードを受け取る際にはスコアカードに記載漏れがないかの確認は行わない。

4. 審判員に関すること

① 3級公認国体審判員の削除

② 審判員資格の喪失に『特別の理由がなく』の条件が削除

③ 全日本学生アーチェリー連盟の特例に、『大学での競技歴が2年以上』の条件が追加

④ 『資格の復活』が追加

→ 当面は新規2級・3級審判員講習会を受講してもらい対応

⑤ エンブレムを帽子の側面に貼付け可能に

⑥ 服装は下衣は白またはベージュ系のスラックスまたはスカートとする。

→ 当面は東京都では審判員は「白」を着用することとする。

5. 運用について

① 東京都アーチェリー協会主催の公認競技会は、2016 年 11 月 1 日より 2016～2017 年版の競技規則を用いて運営する。

② 選手への周知期間を必要とするため、2017 年3月末日までは、厳しい措置は取らないこととする。(どのような対応をとるかについては、その競技会の競技委員長に一任する)

2 パラアーチェリーについて（競技規則第 19 章 パラアーチェリー）

2017 年 9 月に、全国身体障害者アーチェリー選手権大会（フェニックス大会）が東京で開催されることになった。この機会に、パラアーチェリーのルールについて知っていただきたい。

1. 種別

① リカーブ（個人・団体）
② コンパウンド（個人・団体）
③ 視覚障害（ＶＩ１、ＶＩ２/ＶＩ３）
④ Ｗ１オープン（個人・団体）
Ｗ１オープンでは、リカーブボウ、コンパウンドボウのどちらを使用しても良く、いずれもリリースエイド（リリーサー）の使用が可能。ただし、コンパウンドは引き重量は最大 45 ポンドとし、ピープサイトおよびスコープサイト、水準器の使用はできない。

2. クラス分け

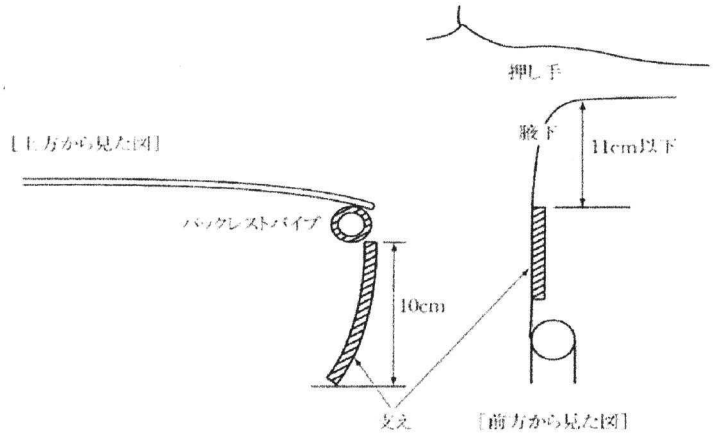
障害の種類や程度の異なる者が、平等な条件のもとで競技に参加できるようにするため、障害の種類や程度などの医学的側面や、競技に関連する運動機能面などによって競技を行うクラスを区分することをいう。
この「クラス分け」は 2 名で構成される国際クラス分け委員会（国際クラシファイヤー）により判定がされる。

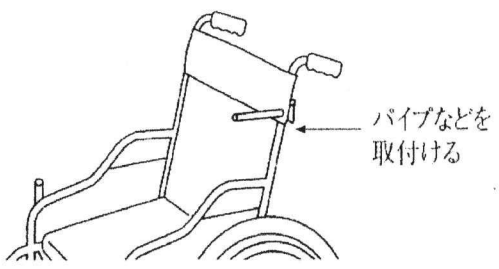
3. 補助用具

身体に障害がある競技者として使用できる補助用具には、次のようなものがある。

① 車椅子

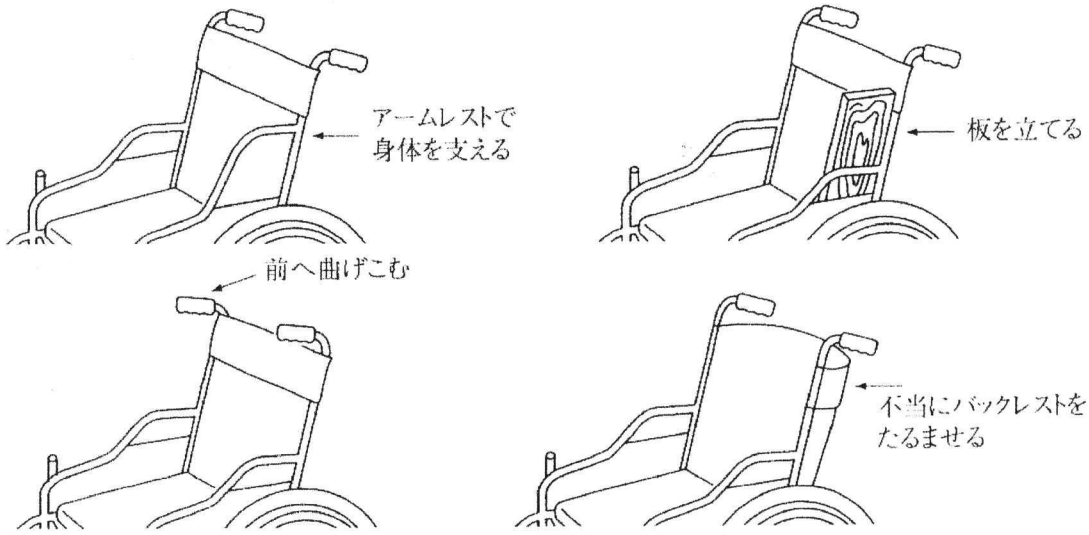
- 車椅子のハンドリムにストリングが触れる、あるいは車椅子そのものにストリングが触れた状態で矢を発射してはならない。（押し手を支えているとみなされる）
- 競技者の脇の下 110mmより下に車椅子の背もたれの支柱等の部品が位置しなくてはならない。





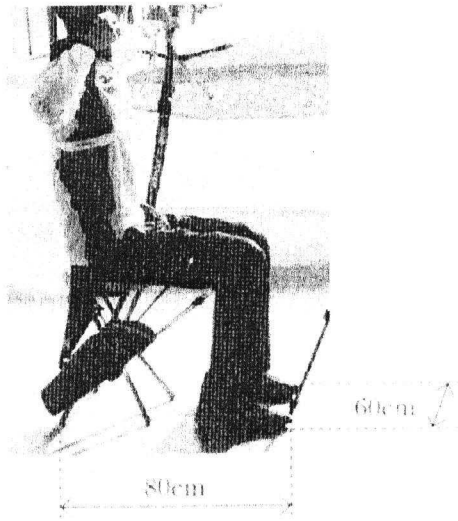
- 身体を支える突起物が椅子の垂直な支柱から 100mm以上の長さがあってはならず、かつ脇の下から 110mmより下に位置しなくてはならない。

- 車椅子の全長は 1.25mを超えてはならない。
- 車椅子の競技者は、足やフットレストを地面につけてはならない。
- 次のような車椅子は行射に有利になるとみなされ、禁止される



② スツール（背もたれ・肘掛けのない椅子）

- 行射中はスツールのどの箇所でも、押し手を支えてはならない。
- スツールの脚および競技者の足によって形成される地面の範囲は 60ｃｍ×80ｃｍの広さを超えてはならない。



③ ブロック

④ 許可されている身体支持具

- Ｗ１は突起物とストラップの同時使用可能
- 胴体部分を固定するストラップ１本（２インチを超えない幅）
- 脚部を固定するストラップ

⑤ 義手

⑥ リリースエイド（リリーサー）
⑦ ボウバンテージ
⑧ 押し手の添え木
⑨ 引き手の添え木
⑩ アシスタント（矢をつがえることができないＷ１選手のみ）

4. ラウンド

実施されるラウンドは健常者と同じ。
Ｗ１については 50mラウンドを全寸法の 80ｃｍ標的面で行う。

5. 競技会場

① 車椅子またはスツールを使用している競技者は、常に射線上に留まることができる。（パラアーチェリー大会は基本１立で行われるため）
② 会場の設定はＷＡ競技規則によるが、競技者１名あたりの幅は、最低 1.25mが割り当てられる。（健常者の大会は 80ｃｍ）

6. 健常者の大会に障害者アーチャーが参加した際の対処の仕方（東京の場合）

健常者の大会なので障害者に合わせる必要はないが、様々な配慮が必要となる。

① 用具検査の際には、弓具だけでなく、車椅子、スツール等の補助用具についても検査を行う。
② ムーブアップの 10 秒間で射線に入ることが難しいようであれば、周囲の選手の了承を得て、ウエイティングラインより前方で待機させる。
③ 得点記録と矢取りの代行を、同的の選手に依頼する。
④ 車椅子またはスツールを使用している競技者は、行射が終了しても、射線上に留めたままにする。ただし、後立ですぐに矢取りになる場合のみに限る。
⑤ 車椅子、スツールを使用する選手が、押し手を支えているとみなされる射ち方をしていたと審判員によって確認された場合には、そのエンドの最高得点の矢を削除する。違反が繰り返し行われる場合には、その選手を失格とする。
⑥ 介助が必要である選手に対して、審判員は手助けをしてはならない。（特定の選手に有利になる行為とみなされるため）
⑦ 聴覚障害者のために、「競技上の注意」などの選手への伝達事項は、紙などに記載されたものを用意する。

3 審判員の所作について

2020 年の東京オリンピック開催に向け、全日本アーチェリー連盟は、これまで日本にはなじまないとして見送ってきた日本独自の規則改め、ＷＡのルールブックに定めるものに改正を行っている。審判員の所作についても、ＷＡが主催する国際大会での審判員の所作に倣う形に変更しつつある。
来年度は東京にて全日本室内選手権大会が開催されるため、今後、東京都アーチェリー協会においても、これを取り入れたい。

1．審判員の業務について（おさらい）

① 審判員の服装

■ 赤のポロシャツ（半袖または長袖）　■ 白のスラックスまたはスカート
■ 赤帽子　■ エンブレム（シャツの左胸または帽子の全面または側面に付ける）
防寒着、防水服を着用する際には、常に競技者からわかるよう、赤色、あるいは透明なものを使用する。

② 審判員の持ち物

■ 競技規則　■ ルーペ　■ 赤ボールペン（油性）　■ メモ帳　■ ストップウォッチ
■ イエローカード/レッドカード
できれば
■ 白マジック　■ プライヤー　■ ホイッスル

③ 競技会の役員

■ 競技委員長	１名（１級）	■ 計時員	若干名
■ 総務	若干名	■ 記録長	１名
■ 審判長	１名（２級）	■ スコアラー	若干名
■ 審判員	若干名（３級）	■ その他必要な役員	若干名
■ ディレクターオブシューティング（ＤＯＳ）	１名（２級）		

④ 審判員の任務

■ 競技場の設営
■ 用具検査
■ 行射管理
■ 安全管理
■ 得点記録の管理
■ 競技者、チーム監督からの質問、疑問、苦情、要望等の処理

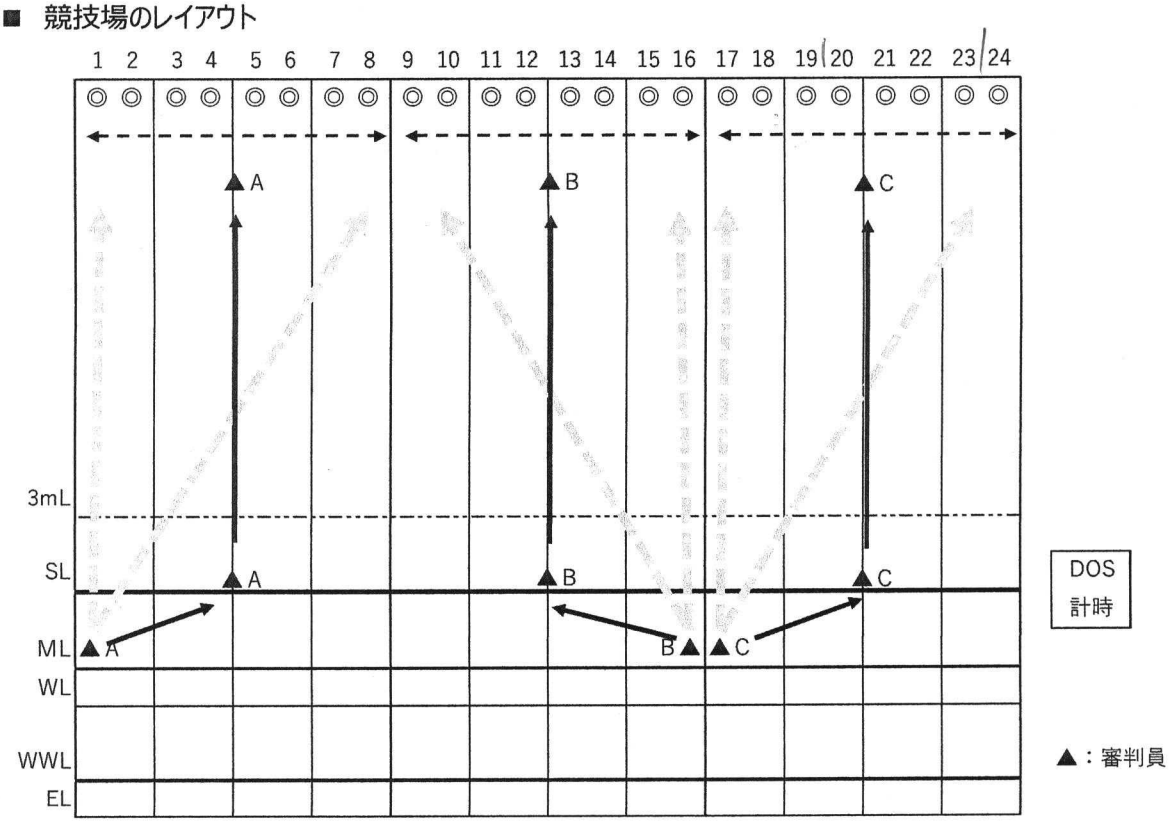
2. 競技会での審判員の動き

① 審判員の配置

ターゲット競技会では、少なくとも 10 的に 1 名、フィールド競技会では 4 的に 1 名審判員を配置する。

ターゲット競技会では、審判員は隣のエリアの審判員と椅子を付けて座る。

■ 競技場のレイアウト

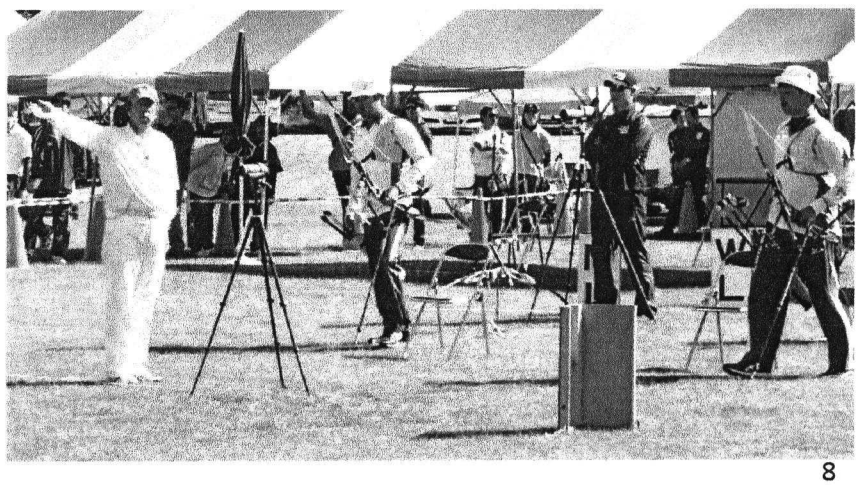


② 審判員の動き方

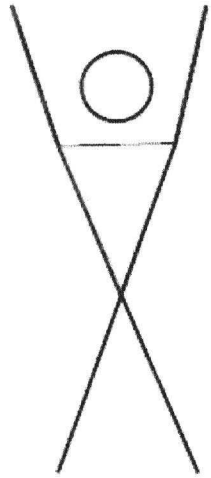
- 審判員は競技が開始される前に、担当エリアの安全を確認し、椅子に座る。まだ安全でないと判断した場合は、椅子には座らない。
- ＤＯＳから最も遠い場所にいる審判員Ａは、他の審判員が着席していることを確認したうえで、射線上まで進む。審判員ＡはＤＯＳの方を向き、アイコンタクトでタイミングを計り、的側の腕を肩の高さまで上げて行射開始ＯＫ（ＧＯ）の合図を出す。
  ＤＯＳはこの合図を受けて、行射開始のブザーを鳴らす。
- 担当エリアの選手全員が行射を終了しても、審判員は立ち上がったり、手を上げたりはしない。
- 行射終了 15 秒くらい前になっても、射線上に選手が残っていたら、審判員は時間外発射に備えて選手のリリースモーションの見える位置まで歩いて移動する。（この時レッドカードはすぐに出せるよう、手に持っておく）行射終了のブザーが鳴った時、矢がストリングから離れていなくても、指がリリースに向けて反応するなど、少しでもリリースの動きが見られた際には、時間外発射にはしない。
- 矢取りの三声のブザーが鳴ったら、審判員は射線まで移動する。選手があらかた矢取りに進んだら、審判員Ａは、手を的方向に出して、他の審判員に前に進むよう合図する。
- 審判員は横の列をそろえて的前まで歩き、担当エリア中央で的の手前 10mほどの場所で、ジャッジコールがあるまで待機する。選手からジャッジコールがあったら速やかに対処し、終わり次第、待機場所に戻る。
- 選手の矢取りが終了したら、審判員はその場で的止めが抜けかけていないか、的前に矢などの忘れ物がないか確認を行う。確認が終わったら的に背を向け、射線の方を向いて待機する。
- 選手全員が的前から離れたのを確認し、審判員Ａは他の審判員に戻る合図を出す。審判員は選手を追い越すことなく、横の列を合わせて歩いて戻ってくる。
- 審判員Ａは射線上でＤＯＳの方を向き待機する。他の審判員は椅子まで戻り、担当エリアの安全確認をして着席する。審判員Ａは審判員全員が着席するのを確認し、ＤＯＳに手を上げて行射開始ＯＫ（ＧＯ）の合図を出す。
  ＤＯＳはこの合図を受けて、行射開始のブザーを鳴らす。
  以下これを繰り返す。

③ 審判員の所作

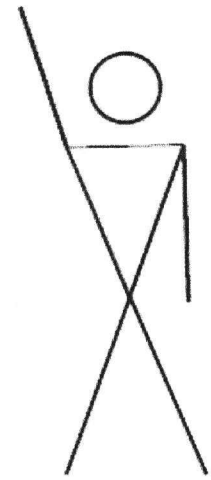
- 行射開始（ＧＯ）の合図



■ 跳ね返り矢の発生

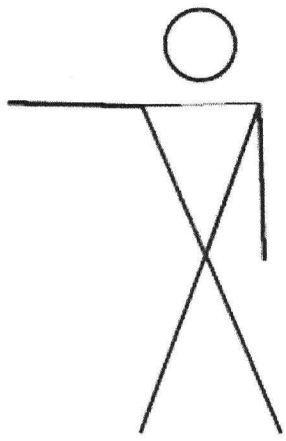


■ 用具破損の発生

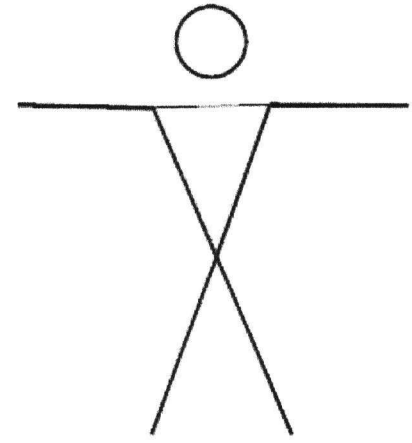


■ 採点を行え

またはターゲットでのマッチ戦勝者



■ マッチ戦のシュートオフ



ＷＡ　ジャッジガイドブックより